

高度経済成長期の学校給食

東京都の学校給食喫食者と学校栄養士を対象とした調査研究

School Lunch during the High Economic Growth Period :
Studies Targeting School Lunch Eaters and School Dietitians in Tokyo

赤松利恵・渡邊紗矢

AKAMATSU Rie and WATANABE Saya

はじめに

① 研究1：学校給食の記憶

② 研究2：学校給食の献立作成の要因

③ 考察

まとめ

【論文要旨】

日本において、肥満は生活習慣病のリスク要因として、重要な健康課題である。肥満の課題は、中高年で深刻であり、この多くの者は、戦後大きく生活が変化した高度経済成長期の学校給食を経験している。食生活は健康への影響が大きいことから、高度経済成長期の学校給食を振り返ることで、現在の日本人の健康課題を考察できるのではないかと考え、本研究では、2つの研究を実施した。まず、研究1として、高度経済成長期の時代に学校給食を食べていた人182人を対象に、インターネットを用いた質問紙調査で、当時の学校給食についてたずねた。そして、対象者を学校給食を経験した年代で3群（昭和30年代のみ、昭和30年代と40年代、昭和40年代のみ）に分け、属性や当時の給食時間の様子、好きなメニュー、苦手なメニューを比較検討した。その結果、脱脂粉乳を提供する学校は昭和40年代で減っていた一方で、昭和40年代ではソフト麺やミートソースのメニューが提供されていた。研究2では、東京都で学校栄養士として勤めていた人を対象に、昭和30年代から勤めていた対象者（3人）と昭和40年代から勤めた対象者（4人）を分けて、グループインタビューを実施した。その結果、当時の学校給食提供には制限があったが、子どもの栄養改善のために、おいしい給食を提供しようと努力をしていたことがわかった。学校給食の欧米化もその1つであった。学校給食で味を覚えた子どもたちは、高度経済成長期後半1970年に出版されるファストフードを抵抗なく受け入れたことが推察された。現在の日本人の肥満の課題は、学校給食が原因とはいえない。しかし、学校給食は子どもたちの身体だけでなく、食嗜好をも形成することを今一度認識し、我われは今後の学校給食を考える必要があるといえる。

【キーワード】 学校給食、高度経済成長期、子ども、学校栄養士